

---

# 光と闇の法剣-Side:A-

水瀬藍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

光と闇の法剣 - Side : A -

### 【Nコード】

N4857A

### 【作者名】

水瀬藍

### 【あらすじ】

時と場所を違えて紡がれる恭子の知らない物語。幾つもの運命を知ることによって真実は明らかになる。

## SS - 1 - 1 : 風見祐里

大切なひとを失いかけた。そして、大切なものを失くした。それはまだ何も知らなかったとき。純粹な想いだけで護れると信じていたころ。

示された道はひとつではなかった。ただ、選ぶべき道は決まっていた。

復讐 - - ではない。

心に抱いたのは「憎い」ではなく、どこまでも「許せない」という感情。

一人の少年に出会ったとき、鏡の中の自分を見たような、そんな錯覚に陥った。

映し出されるのは、深い悲しみと、強い怒り。

彼は闇を受け入れた。私もまた光を捨てた。

たった一瞬。すべてを終わらせる、そのためのために。

せめて、大切なひとが幸せでいられるように、私たちは闘う。

\* \* \*

対邪族の拠点となる主要都市におかれる司令室のうち、本家に近いところにある支部。その副司令官 - - 司令官が失踪したいま、実質上の司令官代理である - - 風見祐里は、近年まれにみる嬉しくもない忙しさに頭を悩ませていた。

「 - - 副司令、邪族反応です。総数、三！」

いったん落ち着いたかに見えた邪族の襲撃だが、ふたたび司令室に緊迫した空気が広がる。

オペレーターの報告に心の隅で焦りを感じながらも、つとめて平静を装った。祐里の不安は伝染する。イコール指揮系統の麻痺につながるからだ。うぬぼれでなく、そのことをわかっていた。

「邪族の特定を急いで。現在位置は？」

薄暗闇に浮かぶモニターに映し出された周辺地図に、いくつもの光点が輝いている。不気味に赤く光っているのは、すべて邪族の存在を示すものだ。

新たに加えられた光点は支部のすぐ近く。

「双灰峰の手前……黒家の私有地に向かう道です！」

「なっ……」

かつて御神の灰家があった場所。そして、現在はどうも隠れ家となっているはずの場所。しかし、こんな大胆なことをするのか。

祐里は一瞬だけ、通信席に座った少女に目をやった。

「すぐ映像を出して！それから……」

「邪族の特定、終わりました。ランクAの低位邪族が一体、二体の中位邪族はそれぞれランクDとランクC！モニターに出します」

「……低位のほうには一般隊員を回して。誘導は情報部に任せます。中位のほうには作戦部からレベル4以上の隊員を」

指示に従ってオペレーターが各所に通信を行う。的確かつ迅速な対応。まだ若くして指揮系統に配属されているのは、その指導力と判断力の賜物だった。

しばしモニターを見つめ、そこで違和感を覚える。普段は見慣れているために流し見ることが多いのだが、いつもとは違った感じがした。

「……映像、拡大できる？」

緑の繁る山々を背景に霊体の邪族がたたずむ。専用のカメラでなければ撮れない、ある意味お宝映像だが、そのかたわらに……

「……男の子？」

誰かの呟きに、はっとさせられる。

「御神三家のライブラリで照合。一致する人物がないか調べて！」  
祐里の発した言葉に、その場の全員が息を呑んだのがわかった。

邪族と動く人間を組織の中に探すこと。それはつまり、裏切り者が

内部にいるということだから。

「黒の波動は？」

「いえ……反応ありません」

「そう」

邪族と契約して闇を受け入れた者には、邪気とは違う特有の気配がする。それを組織では、黒の波動と呼んでいた――このネーミングは一種のあてつけだ。

たいていの人間は、闇に侵食された時点で自我を失い、人の姿を維持できなくなるのだが、高位の霊能者に限って原形を保つことがあった。その例を一人知っている。

二年前――あの忌まわしい邪神事件を起こした研究部の人間。禁断の呪によって霊質の高い生物を喰らい、邪族と契約しながらも黒の波動を隠し通して何人もの犠牲を出し、御神三家を危機に陥れた男。

「――副司令、本家から直通回線で通信です」

自分を呼ぶオペレーターの声に、祐里は我に返った。

「……本家から？出して！」

モニターに白髪混じりの中年の男が現れる。昔から変わらない、他人を寄せつけない鋭い目つきをした御神の人間。

「……黒の家長……」

珍しい本家からの通信。それだけでなく、まさか、巷で話題の神代重成が出てくるとは。

祐里はおもわず、また通信席のほうを見てしまった。

「――副司令の風見祐里です。何か緊急の用件でしょうか？邪族の対応に追われているので、手短にお願いしたいのですけれど」

明らかに嫌味が含まれているような口調になってしまったが、許容できる範疇だろう。指揮系統では上下関係といった序列がそれほど厳しくない。敬語を使うことは当たり前だが、権限としては同等に近いものが与えられている。

それに――感情を抑えきるのは、なかなか難しかった。

「通達だ。作戦部の星野恭子の召集を禁止する」

「は？」

表情を崩して間抜けな声を出してしまう。

「奴らが邪族と共に人間を動かしたということは、法剣のありかに見当がついているということだろう？ わざわざ向かわせることもあるまい」

「それは、そうですが……」

「人間は絶対に逃がすな、捕らえろ。場合によっては殺しても構わん」

「そ、それは……」

「家長会議での決定だ。総帥に別件の用があるため、私が代行している」

「……っ！」

あまりにもふざけた物言いに、理性の糸が切れそうになった。完全になめられている。それとも、挑発しているつもりか。どちらにせよ、ろくなことではない。

緊急時であろうとも総帥の代行は認められていない。そもそも、御神三家において最高機関である家長会議は、二年前から凍結されていて一度も開かれていなかった。いやそれよりも、まだ報告すらしていないのに邪族と人間の出現を知っていることがおかしい。これでは自分が『向こう側』だと言っているようなものではないか。

それに……人を殺せ、と？

祐里は人を殺したことがあった。自分に嫌悪を覚え、行為に恐怖を覚える。そのうえでの、殺人。けれど相手は元人間であって、邪族と契約した者に限る。反応もない、明らかな『人』を殺せとは異常な命令だ。

組織の人間はさすがに馬鹿ではない。気づいた者も多いだろう。

祐里が黙っている数秒間、皆が息を詰めて行く末を案じていた。

「……わかりました。では、失礼します」

答えると同時に黒の家長が通信を切ったことで、今度は祐里の決

断に注目が集まる。

- どうすればいい？

決まっている。なめられているのなら、思い知らせてやる。挑発されているのなら、乗ってやればいい。結局、することは変わらない。自発的か、受身か - その程度の違いだ。

「- 現状を維持して、邪族の殲滅を最優先とします。できれば、対象の人間には接触しないように。それから、以後の本家からの通信はすべて無視しなさい。回線を遮断しても構わないわ。責任は私がかかります。いいわね？」

滅茶苦茶な指示に、だがしかし、ほっとしたような安堵の溜息も聞こえてくる。

「誰も異議はないの？」

祐里の問いに、何人かが苦笑で応えた。

「ここは、副司令の指揮下ですから」

「ありがとう」

信頼を言葉にしてもらえて、その場の全員に感謝の意を表した。

祐里は考えていた。恭子を召集してはいけないわけ。黒の家長が言った建前も、確かに重要な理由ではある。しかし、ふざけた通信の内容からして、信じることなど到底できなかった。

だが、神代重成という人物がそんな簡単なミスを犯すかといったら、むしろノーだ。誰でもそう答えるだろう。けれど、その先入観さえなければ - 本当に恭子を対象の人間と逢わせたくないだけだったら？

彼は現れてから一步も動いていない。年の頃は十五、六くらいだろう。会ったことはないと思うのだが、その顔に見覚えがあった。

「まさか……」

真っ先に浮かんだ名前に、祐里は言葉を失った。

「加奈」

「はい？」

オペレーターのひとりが振り向く。周りにはほとんど知られていないことだが、この少女は黒家の――神代家の末娘である。

とある事情から預かっている、大事な――人間だ。

「あとはよろしく」

「わかりました」

この世界でも笑顔を絶やさない、愛すべき後輩に見送られて、祐里は司令室を出た。

\* \* \*

駅前の大通りに近い住宅街の一角、住まう者が一人しかいない家があった。周りに比べてどこか寂れた印象を受けるのは、やはり事情を知っているからだだろうか。

結局、中位邪族の殲滅には恭也だけを行かせた。レベル4以上は他にいなかったのだ。皆、現場からは遠い場所にいる。かといってレベル3以下の隊員を向かわせるのは危険すぎた。一歩間違えば命を落とす。実力が足りない者を行かせることは出来なかった。

しかし、恭也も強いわけではない。レベル4では最下位だ。だからこそ、レベル6の恭子と組ませたのに。

――始まったのか。二年前の……続きが。

確認したいことがあって、法剣の所持者――星野恭子の自宅にやってきていた。鍵は本人から預かっているため、堂々と入ることができる。もつとも、なくても勝手に開けるつもりだったが。

人の気配は、なかった。

恭子は学校だろうか。もしかしたら、悪いクセで丘にでも行っているのかもしれない。まだ短い付き合いだが、それなりに恭子のことを理解しているつもりだった。

玄関の扉を開き、靴箱の上を覗き込む。

「……やっぱり」

小さな声が洩れた。飾り気のない写真立てに、懐かしくも悲しい



光景が、時を止めて写し出されている。

家族四人で恭子と並んでいるのは、よく知る亡くなった両親と、そして――

ピリリリ……ピリリリ……。

無機質な電子音が、支部へ戻ろうとしていた祐里の思考を中断させる。

「もしもし、加奈？」

『祐里さん！あの、恭也くんが！』

加奈の慌てふためいた様子に、瞬間、過去の悪夢がフラッシュバックした。

「きよ、恭也は？無事なのっ！？」

取り乱して、あのときと同じ言葉を返してしまう。固く閉じられた扉にすがりついて、ただ泣き叫ぶことしか出来なかった、あのときと同じ言葉を。

加奈は祐里の反応に驚いたようで、きよんとしていた。

『えっと……大丈夫です、けど……ランクDの中位邪族に逃げられて、対象に足止めされています』

「そう」

その報告に、ひとまず安心する。

「人員、回せる？」

『いえ、誰も』

「わかった、私が行くわ。実体化まで一時間以上残ってるわよね？追跡は続けて。それと、周辺一キロ圏内のレベル2以上の一般人の避難を。念のため、ね」

『はい』

彼が向こう側の人間だとは思えない。情報部から盗み出した情報が正しければ。

けれど、人は変わるものだから。

（――間に合って、お願い！）

祈るような気持ちで、祐里は走り出した。

\* \* \*

祐里の恭也に対する愛情は、皆が思っているよりもずっと強い。ただ、まっすぐにそれを示すのが気恥ずかしいだけで。

恭也と一緒に生活に幸せを感じることに。恭也を大事にしてあげたいと思うこと。恭也に自分を好きでいてほしいと願うこと。

……ブラコンといわれても仕方がない。

初めて恭也に会ったのは、十二歳のときだった。七つも離れていたが、それは一目惚れだったのだろう。『可愛い』という気持ちが『愛しい』という想いになるのに、それほど時間は必要なかった。内気な弟の腕をひいて強引に連れ出すのが常だったが、外の世界には楽しいこともいっぱいあるのだと教えてあげたかったからだ。はじめ心を閉ざしていた弟が自分から手を握ってくれたとき、どれだけ嬉しかったか。いまでも鮮明に思い出すことができる。

十五歳になった誕生日の夜、母は不思議な問いを投げかけてきた。

『守りたいもの、ある？』

静かに、優しくも厳しく、かすかにつらそうな表情をたたえて、母はそう言った。

守るという言葉の意味を、その重さを、ちゃんとは理解していなかった。だから、深く考えずに答えた。

『うん、あるよ。恭也のこと、守ってあげたい！』

どこまでも純粹なその想いは、大人になった現在も変わっていない。

『守りたい』

祐里にとって、戦う理由はそれだけで十分だった。

\* \* \*

霊山、双灰峰に続く登山道を背にして、二人の少年が向かい合っている。

どちらも剣を抜いているわけではないが、黒衣の少年は揺るがず、組織の制服を纏った少年は非難の色を込めて、お互いに強い視線を注いでいた。

「――恭也！」

祐里の一声で、ふっと空気がゆるむ。

「ここは私が引き受けるわ」

「……わかった。俺は、逃がした奴を追う」  
身をひるがえそうとした恭也の腕を、祐里は反射的に掴んで引き止めた。

「深追いはしないで。三十分を切ったら、恭子ちゃんを呼んでかまわないから」

「でも、恭ちゃんは――」

「お願い」

じっと恭也の目をみつめて、必死に訴える。

「……わかったよ」

戸惑ったような表情を浮かべた恭也は、振り返ることなく市街のほうへ坂を下っていった。その後ろ姿が見えなくなるまで送って、向き直る。

「蒼司くん、ね？」

「……貴女も僕のことを知っているんですね」

いま、敵味方は関係ない。問いを発し、答えを返すだけ。

「四年間、ずっとあなたを捜していたのよ？」

そう、恭子は一日たりとも『日課』を欠かしたことはなかった。事件が起きた現場周辺での聞き込みや、当時の膨大な量の書類の閲覧。邪族や法剣の関係からも調査をしていた。もちろん、組織の人間として厳しい訓練や任務をこなしながら。

だがそれでも、祐里や恭也のように染まるうとはしなかった。出来るかぎり学校へ行き、いつでも日常に――過去に戻るように、

境界線を引いていた。

「戻る気はないの？」

「――特別なことはなくていい。ふつうに、平凡な生活を、蒼司と過ごしたいんです。」

胸に秘めた夢を教えてくれた恭子は、珍しくはに كان いた。

彼女は考えたことがあっただろうか。もし再会できても、戻る可能性は少ないのだということを。

「戻る？どこにですか？」

「決まってるじゃない、恭子ちゃんのところよ。あの子はあなたを捜すためだけに、こつちの世界に入ってきたのよ？」

わずかに表情を曇らせたようにも見えたが、それだけだった。

「あなたは、何がしたいの？」

自分から姿を晒しておいて何も語ろうとしない蒼司に、苛立ちが募ってくる。

「なんで、戻ったの？なんで、まだ――」

さつきとは違う意味で、祐里は問いかけた。彼にも伝わっているはずだ。

「僕は、まだ終われないんですよ。やることが、ありますから」

儚げで、もろく壊れてしまいそうな蒼司の姿に、身に覚えのある悲壮な決意を見て取った。

「あなたは……黒の家長を、探しているの？」

ほんの少し、瞳の奥の濁りが増した気がした。

「――今夜、姉さんに会いに行きます」

「えっ？」

突然の宣言に驚かされる。

「いまも監視されていますから、たぶん包囲されるでしょう」

「何を考えているの？」

その存在には気づいていて、あえて無視していたのだが――監視？

「姉さんに接触すれば、うちの上層部は法剣を奪おうとするでしょう。いまのところ中立――相互不干渉ということになっていますけ

ど、おそらく神代も動くはずです」

「あなた……」

「いい加減、終わらせましょう。長引けば、傷つく人が増えるだけです」

てつきり、相手方がとうとう動いてきたのかと思っていた。だが、違った。

蒼司は本当に終わらせたいだけなんだ。復讐したいわけではなく、この状況が生み出す理不尽さが許せないだけ。祐里には、その気持ちがよく理解できた。嘘でないこともわかった。

「貴女は適当な理由をつけて、御神の本家に僕を連れて行ってくればいいですから」

「……私があなたの言うことを信じるとでも？」

「信じなくても構いません。それなら、ほかに手立てはありません。揺さぶりをかけようとした祐里の言葉を、あっさりと切り捨てる。

「けれど、終わらせたいのは同じでしょう？ 風見祐里さん」

「どうして、私のことを……」

「二年前、湯沢の研究所にいましたよね？」

「……っ！」

嫌なことを思い出させてくれる。

「僕もいたんですよ。もちろん、別件ですけど」

「……いいわ。それで？ 何か、手伝うことはある？」

「これを……お願いできますか」

蒼司は懷から取り出したものを、祐里に差し出した。恭子に渡せと、そういうことだろう。

「預かるわ」

蒼司が無言でいるので、御開きだと思って立ち去ろうとしたが、ふと気がかりができて足を止めた。

「包囲されるって言っていたけど、二人で大丈夫？」

「ええ。神代に勘づかれたら元も子もないですし、姉さんも法剣を持っているんでしょう？」

「そう、ね……」

こともなげに言う蒼司を、なぜだろうか、祐里は空恐ろしく思った。

「それじゃあ」

数歩あるいて振り返ったとき、黒衣の少年はもういなかった。気を取り直して腕時計を見やると、逃げた中位邪族の実体化まで十分なかった。

恭也は、ちゃんと恭子を呼んだのだろうか。それとも、追いついて滅ぼせたのだろうか。急に心配になってくる。

加奈に連絡して聞いてみようかという矢先、携帯が鳴った。恭也からだ。

「もしもし？」

「祐里姉、ちょっと頼みがあるんだけど……」

\* \* \*

この場所から、街の全景を綺麗に見渡すことができる。人工と自然の調和が作り出す景色。

そこには笑う人がいて、泣く人もいて、一瞬一瞬のうちに様々な出来事が繰り広げられているのだろう。

ときに心が傷つくのは構わないと思う。それでも、人は未来を望んで小さな――それでいて大きな一歩を、踏み出していくはずだから。

だけど、日常を壊すようなことは決して許せない。命という、取り返しのつかないものを奪おうとする――純粹なだけの、透明なだけの力を、私は許さない。

多くの人たちが何も知らないで安心して生活できるように、日常を守るために、私たちには力が与えられているのだと思うから。

私たちは闘う。すべてが終わる、そのときまで。

## SS-1-1：風見祐里（後書き）

恭子が、丘で考え事をしていた時間。ファミレスでの会話の詳しい説明。あとは黒封筒の行方。

事件の全体像や組織の過去なんかも見えてくるようにしました。何か思うところがあったなら嬉しいです。

SS - 1 - 2 : 柚原美里

たまに哲学的な本を読んだりすると、現実ってなんだろうと考える。

人が人を殺すという、忌むべき同族殺しの蔓延した世界。

わたしにとっては、堪えがたい恐怖をもたらすものだ。

いつだったか、文芸部の友達が冗談めかして言ったことがある。

- 化け物が人間を殺すぶん、ファンタジーの世界のほうがマシかもしれないね。

本気でそう思うほど、二年前のあの事件は、わたしの心に深い傷を刻んでいた。

けれど、ただ被害者であつたわけではない。

わたし自身も一人の女の子を殺してしまったのだ。

ずっと知っていたはずだけど、それを自覚してはいなかった。

始まりは、現実と非現実が交差した日。ふたりの少女との出逢い

-

\* \* \*

初めて彼女に会ったときから、どことなく陰があるようにはみえた。べつに表情や態度に出ていたわけではない。なんとなく、そう感じただけだった。

快活そうな外見とは裏腹に、一言でいってしまえば - おとなしい子だった。口数も多いとはいえないし、微笑みも控えめで、感情の起伏が少ない子ではあった。けれども、ごくふつうの女の子だった。

他人と違うところがあるとすれば、一週間のうち二日 - ずっと見かけないときもあったが - 学校を休むことだろうか。

遅刻・早退・欠席はあたりまえ……なのに、容姿端麗・成績優秀・



運動神経も抜群ときている。そのせいか、妬みや僻みの対象にもなっていた。

クラスの女の子たちは、そんな彼女と親しくなろうとは思わなかったらしい。

まあ一般論から言っても、学校に来られない子はどこでもそんな感じた。たいてい孤立していく。だけど、本人は気にしていないようだった。

不自然だとは思っていた。

欠席の理由としては風邪が多いけど、翌日に治ったのかと聞くと、一回きよんとしてから思い出したように返事をするのだ。でも、嘘をついているときのような焦りとか、そういうものを彼女は感じさせなかったから、お母さんが過保護なのだろうと、そのくらいにしか思っていなかった。

本当に不思議な子だ。

なぜ彼女に惹かれたのかは、いまいわからない。気がつけば毎日、彼女の様子を見に行っていた。進級してクラスが変わっても。

たまにしか会えないのに、彼女のことがどうしようもなく好きだった。些細なことにも耳を傾けて笑いかけてくれると、ふかふかで温かく包まれているような、くすぐったい感じの幸せな気分になれる。

わたし自身は友達が少ないわけじゃない。むしろ、多いほうだと思う。だから周りの友達からも、なんであんなのと……なんて言われちゃったり。

そうすると、なんでこんなのと……なんて考えてしまう。欠点はないけど、特別に長所があるわけでもないから。

けれど、結局わからなかった。理屈じゃないのだ。ずっと一緒にいたい、もつと知りたいという欲求みたいなものは。

きつと、わたしの初恋だと思う。共学校なのに变だけど。

文芸部で小説に昇華していたのは、そんな一途な恋心だった。

\* \* \*

春が終わろうかという五月のある日。前触れもなく、突然それは姿を現した。

学校の帰り道のこと。いつも同じように、おしゃべりをしながら歩いていたわたしたちは、こちらをにらむ野良犬の群れと遭遇する。

道路の真ん中を占拠して動こうとしないのを不審に思つて、恭子ちゃんに話しかけた。すると恭子ちゃんは、なぜか驚いたようにわたしを見た。

野犬の群れが吠えながら向かってくると、恭子ちゃんは身を硬くしたわたしの腕を引いて走り出した。

凄いい速さで、半ば引きずられるように、恭子ちゃんと住宅街を駆けていく。握られた手から伝わるぬくもりに、不謹慎だけど、少しどきどきしていた。

息を切らせながら必死に走っていても、追ってくる野犬の唸りは全然小さくならない。

「あつ」

わたしはかすかに声を発した。Ｔ字路で恭子ちゃんが選んだ道は、行き止まりだと知っていたから。

「そんなっ!？」

すぐに恭子ちゃんの絶望的な声がして、わたしたちは足を止めた。行き止まりで立ち往生、袋のねずみ。ずつつないでいた手を離して、恭子ちゃんはわたしをかばうように前に立った。

「……目を閉じて、耳を塞いで、そこから動かないで。わかった?」

「……うん」

恭子ちゃんの手に握られた剣を見て、困惑しながらも頷いたけれど、わたしはそれほど聞き分けのいい子じゃない。

興味があつたのだと思う。いままで知ることが出来なかった、恭子ちゃんが学校で見せるのとは違う一面に。

この時点でわたしは、それが非現実への入口だったのだとは気づいていなかった。

恭子ちゃんの低い呟きを耳にして、わたしは、そつと扉を開いた。瞬間――真紅の輝きが視界を埋め尽くした。その熱く感じるほどの眩しさに耐えられずに、光を閉ざしてしまう。

しばらくして薄く目を開けると、そこには初めて見る少女が存在していた。冷たい氷の仮面を張りつけて、襲いかかる動物を明らかに敵視している。

野犬を相手に真剣を振るう女の子。次々と頭部を、胴体を斬り捨て、その剣には肉片がこびりつき、蒸発する。見るに堪えない、ふつつの神経なら吐き気を催す、異常な光景。

だけど、わたしには恭子ちゃんの華麗な剣の舞しか見えていなかった。

(――きれい)

無駄な動きのない演舞に、わたしはすっかり心を奪われていた。

野犬の群れがまとめて消えたことに、なんの疑問も持たず。

恭子ちゃんが息をついたとき、はっと我に返って、慌てて顔を伏せた。

「もう……いいよ」

恭子ちゃんの言葉におそろおそろといった感じを装いながら、両耳を塞いだ手を下ろして、目を開いていく。演技は――人を騙すのは意外と得意だった。誰もそんなこと思わないだろうけど。

恭子ちゃんは申し訳なさそうに、後ろめたそうに、暗い表情で目をそむけていた。

――何か言わなきゃ。

そう思っ、自然と零れ出したセリフは――

「……怪我、してない？」

「え？」

恭子ちゃんと一緒に、わたしも驚いていた。違う意味で。

その言葉は確かに本心から出たものだと思う。けれども、なんだ

か心がざわついた。

（いい子ちゃんぶってるつもり？何をやってるの、わたしは……）  
その訳もわからず、自己嫌悪に陥った。

黒塗りの車が目の前で止まって、それにわたしが乗るのだとわかったとき、ようやく気がついた。もう、非現実の世界に足を踏み入れてしまっていたことに。

「すみません。迷惑ばかり掛けてしまつて」

「別にいいわよ。ちゃんと誘導できなかった私たちにも非はあるしね」

黄金色の髪の女性は、そう言つて恭子ちゃんに笑いかけから、運転手の人に話しかけた。社会人にしては若いような気がするし、大学生にしては立ち振る舞いが堂々としている。

「それじゃあ、お願いね。私の部屋に通じていいから――ええ、すぐに行くわ」

この道が一方通行だとは思っていなかった。このときはまだ、戻つてこられると思つていたんだ。

\* \* \*

「しばらくの間、こちらでお待ちいただけますか？」

「は、はい……」

小さく返事をする、案内してくれた女性は穏やかな微笑みを浮かべ、廊下の向こうへ歩いていった。

大仰に目隠しをされてまで連れていかれたのは、なんの変哲もない商業ビルのようなだった。ただ、どこにも窓がなくて地下にいるような感覚を覚える。すぐ近くで市内のはずだけれど、何度か違う道を走つたみたいで、右とか左とかは分からなくなつてしまった。

学校の教室にあるような横滑りの扉を開いた先は、質素な装飾の個室だった。デスクとベッドがあるだけで、狭くはないが広いわけ

でもない。詰め所のようなものかと思う。まさか、ここに住んでいくわけではないだろうし。

壁に掛けられた時計を見やると、学校を出てから、まだ二時間も経っていないかった。

どれだけ待てばいいのだろうか。ぼうつと立っているだけというのも、結構疲れる。わたしは手近にあった椅子を借りることにした。外からは、わずかな物音も届いてこない。完全な静寂だった。

（なんで、こんなところにいるんだろ……）

ひとりで頭の中を整理していると、ふと思った。

確かに、わたしは恭子ちゃんのことを知りたい。だけど、わがままかもしれないけど、付属するその他もろもろと関わりあいにはなりたくないのだ。いまは、あくまでも傍観者の立場。もし同じ立場になるのだとしても、それは全部を知ってから。わたし自身がそう決めたとき。とにかく、この状況には不快感があった。

通ってきた廊下には、ほとんど人がいなかったみたいだし、もしかして意外と楽に外に出られるかもしれない。

椅子から腰を上げると、閉めたばかりの扉の前で立ち止まって、深呼吸をする。

（恭子ちゃんに怒られるかな……）

不安というか、心配というか――大きな悩みの種も浮かんできたが、はやく行動に移さないと決心が鈍るような気がした。

きつと、大丈夫のはずだ。わたしは望んでここにいるわけじゃないし、恭子ちゃんのある姿を見たからといって彼女を避けるはずもない。今度だって、何も知らないように普通に接すれば、恭子ちゃんなら解ってくれる。逃げるんじゃない、帰るんだ。

自分のなかで正当な理由を作って、納得させる。わたしは卑怯な人じゃない。

そんなことを一生懸命に言い聞かせていると、不意に扉のほうから勝手に開いた。

「あ……」

扉の向こうには女の子がいた。ここに来るまでに何回か見かけた、少女には不似合いの灰色の制服を着て、頭には置いてピンで留めるだけの帽子が飾られている。

ぱっと見では気づかなかった、けど――

「また、見捨てるの？」

ぼつりと呟いた。たったそれだけなのに、肩がびくと震えた。一気に噴き出した汗で全身が冷たくなり、静かな迫力に押されるように後ずさる。

「か、加奈ちゃん!？」

動揺にうわずった声が発せられる。

(――なんで!?あの子が、なんで!?)

わけがわからなかった。頭が真っ白だったのは一瞬で、すぐにパニックになった。

碧眼の少女は室内に入ると、扉を閉じて逃げ道を塞ぐように目の前に立ちはだかった。そうして、まっすぐに射抜くような視線を向けてくる。

たった数日いっしょにいただけだが、忘れられるはずもなかった。もつとも、思い出したのも久しぶりだが。

「自分だけ逃げるんだ？」

「わたしは巻き込まれたただだよっ!」

まるで全てを知っているというような口調で、少女は嘲笑する。

「でも、彼女の友達なんでしょう?友達なのに、逃げるの?」

話の流れがどこからくるのか、いきなりで脈絡がないように聞こえるが、言葉の断片だけでも、鋭い刃のように心に突き刺さる。そして、痛い。

「あのとき、友達になってくれるって言ったよね?」

過去と現在をつなぐ魔法のように、少女の独白はわたしの記憶を鮮明に甦らせようとする。

「やめて……おねがい、いわないで……許してよお……謝る、から……お願いっ!」

年下の女の子に赦しを乞うのは、みじめだった。けれど何を言われるのか解っていて、それでも受け入れられなかった。汚い人間なのだと、自分が嫌悪する現実の住人と同じなのだと、認められなかった。

「それなのに、一人で逃げちゃった」

「いやああっ！」

罪悪感はなかった。逃げれると思った、だから逃げた。本当にそれだけだったんだ。苦しくなったのは、警察に保護されたあとだった。

「絶望だったよ。気がついたら友達はいなくて、ひとりぼっちで。美里ちゃんが逃げちゃったときに、私はもう死んじやったの。だから、そのあとは全然つらくなかった。どうしてか、わかる？」

「わ、からない……うくっ」

「目的ができたから。それで私はここにいるの。すぐくひどい目にあって、本当に死にそうにもなったけど、ここにいるの。なんでだと思う？」

「や……わから、ない……よお」

「――貴女を殺すために決まってるでしょ！」

激昂して声を荒げた少女は、無造作に腕を伸ばして、わたしの首を掴んだ。

「あ、うぐっ……かな、ちゃ……」

見つめた青い眼に、負の感情以外、何も見いだすことは出来ない。どれほどの力が、怒りが、憎しみが、その細腕から生まれているのだろうか。片手だというのに、首筋に強く指が食い込んだ。

わたしにだって加奈ちゃんの行動は理解できるつもりだ。恨まれなくても仕方ないと思う。自分が助かることしか頭になかったのは、紛れもない事実だから。逃げる以外に方法はなかった。わたしは弱いから、何もできないから。死にたくなかったんだ。

だけど、過去に見捨てた少女に殺されようとしていて、なんだか悲しかった。死にたくなないと、あのときのように強くは思えなかった。

た。わたしが誘拐犯の男に抱いたものを、この女の子に抱かれているのだと思うと、とてもつらかった。

結局、わたしはどこまでも偽善者なのだろう。恭子ちゃんに対してもそう、加奈ちゃんに対してもそう。

もう口にできない、いえなかった謝罪の言葉を胸の中でつぶやいていた。

（ごめんね、加奈ちゃん……）

荒々しく扉が開かれる音と――

「加奈っ！」

遠くで聞こえた女のひとの叫びを最後に、わたしの意識は暗い海の底に沈んでいった。

\* \* \*

「うん……んんっ」

息苦しさを覚えて、拡散していた意識が急に収束していくのがわかった。

「お、気がついたみたい。えと、なんて名前？」

「……美里ちゃん、です」

「おい、美里ちゃん。大丈夫かあ？ちゃんと意識があるんだったら、右手を上げてくれる？できれば、なくても上げてほしいんだけど」

「……先生、めちやくちゃです」

「だって、はやく寝たいんだよ。昨日も徹夜だったんだからさ」

誰かがわたしを呼んでいる。どうやら学校らしいけど、保健室の先生はこんな人だったろうか。それに、聞き慣れないが懐かしい声も混じっていた気がした。

「んっ……」

身じろぎをするのが精一杯で、腕とか足とかが麻痺したように動かない。



「ありや、だめかな。まだ、朦朧としてるのかも。覚醒剤でも打つ？」

「……やめてください」

一緒にいる女の子は元気がないようだった。その小さな声が、何故だか胸に痛い。

学校の保健室とか病院でおなじみの、つんとした消毒液のにおいが鼻をつく。けれど、ここは本当に学校だろうか。何か大切なことを忘れてしまっているように思う。そもそも、なんで寝ているのだろう。

「あー、ちなみに言っておくとだな、ここは学校じゃないよ。むしろ、病院でも家でもない」

わたしは何をしていたんだっけ。どうして、こんなに首が痛いのだろう。というか、意識がはつきりしてくるにつれて、激痛になってくるような。

「美里ちゃん。残念だけど、あなた死んだのよ？」

「先生っ！」

極めて真剣な女性の言葉に重ねて、女の子の悲痛な叫びが耳に響く。

死んだ？誰が？

「怒らないでよ。軽いブラックジョークでしょ？」

そうだった。わたしは死んだんだっけ……なんで、意識があるの？思考がとりとめもなく錯乱している。

なんで死んじやっただんだっけ。えっと――

息ができなくて――誰かに首を絞められて――そうだ。女の子が

――  
がばっ！

「――ごほっ、ごほっ！けほっ！」

思い出して、勢いよく起き上がったけれど、痛みと苦しみが同時に襲い掛かってくる。

「こら、急に起きちゃだめだろ！右手を上げなさいって言ったのに」

「大丈夫!？」

慌てて、二人が崩れかけたわたしの身体を支えてくれる。

「ほら、ゆっくり息を吸って。下を向いちゃだめだからね!」

白衣を着た女性が、わたしの背中を優しくさすりながら言う。女の子はぎゅっと手を握ってきた。

鈍い痛みがある首に空いているほうの手をやると、大げさなほどに何重にも包帯が巻かれていた。これでは、動かそうにも動かないけど、本当に痛い……

少しずつ呼吸が落ち着いてくると、わたしはきよろきよろと部屋を見渡していた。かなりの広さがあって、いくつもベッドが置かれている。そのうちのひとつに寝ているわけだが、周りには、いろんな薬品や薬物が納められた棚があったり、見たこともない機器の数々が並んでいたりする。

「あ、れ?なんで、わたし……」

死んでない。そのことが不思議で、複雑な気持ちになる。

両手でわたしの左手を包み込んでいる女の子は、つらそうに顔を歪めて俯いていた。

「……加奈ちゃん?」

怯えるように、びくつと肩を震わせる。黒瞳の双眸が、ひどく揺れたようにも見えた。

「もう、平気?」

加奈ちゃんの様子を気に留めてか、横から医者とも研究者ともわからない格好の女性が声を掛けてくる。

適当に梳いているのがありありとわかるショートヘアが印象的。

そのわりに整った顔立ちをしていて、美人といって差し支えないかもしれない。年齢は……不詳。三十代といわれても、大学生といわれても、どっちでも納得できてしまう。

「はい。意識はしっかりしてます」

- - 状況は把握できてないけど。

「そう、よかったわ。一応、自己紹介をしておく。あたしは、佐

倉涼子といます。この子と……しばらくは、あなたの主治医にもなると思うけど。とりあえず、よろしくね」

微笑みかけられても困ってしまう。挨拶を返せずに、わたしは聞き返した。

「主治医……ですか？」

「念のため、よ。ちょっとした検査を定期的に受けてもらうだけだから」

「はあ」

釈然としないものが残る。けど、そんなことはどうでもよくて。

「さっき何か聞こえたと思うけど、冗談だから。死んでないよ、わずかに黄泉の階段を上ったくらいだし」

あくびを手のひらで隠しながら、平然とそんなことを言う。

「いま、何時ですか？」

目を覚ますと時間を確認したくなる。それは普通に寝ていても、気絶しようが昏睡しようが同じことだろう。場所も場合も関係ない、習慣のようなものだ。

「んと……夜の十一時になるところね。安定したのはついさっきだから、まだ寝てなさいよ。あたしですら笑えないほどだったんだから。祐里がいなきゃ、どうなってたことか」

「祐里さん？」

「うん、風見祐里。ここの副司令官なんだけど……って、言っていないだっけ？」

「……大丈夫だと、思います」

加奈ちゃんは力なく答えた。どうして、こんなに沈んでいるんだろう。

――わたしを殺し損ねたから？

脳裏をよぎった考えに自嘲する。助かったのに、蒸し返してどうする。

「会ったでしょう？」

「え？」

じつと加奈ちゃんに見入っていたら、反応できなかった。

「迎えにいったひと」

三秒くらい考えて、そういえばと思い当たる。名前は聞かなかったけど、恭子ちゃんと親しそうにしていた、あの綺麗な女性だ。

「祐里が、わざわざ運んできたわけよ。まっさおな加奈もセットで」

「……………」

「もう、ずっと泣いててさ。大変だったわよ。祐里は緊急だとかで司令室のほうに戻っちゃうし、あなたはいつまでも死神とランデブーでしょ？」

面白いたとえをするんだなあと、頭の隅っこで文芸部員として感心したのは、さておき。

加奈ちゃんが、泣いてた？あんなふうに怒りをあらわにして、わたしに掴みかかったこの子が？そういえば、ちよっと目が赤かった気はする、けど……泣いてくれたの？

「誤解を解くために言っておくとね。あなたが会ったのは、加奈であって、加奈じゃないわけよ。よくわかんないだろうけど」

「先生！」

弾かれたように顔を上げて、加奈ちゃんが抗議する。

（……えっ？）

いまごろ気づいたけど……目の色が、違う？

「なによ、自分で言えるの？」

「そ、それは」

祐里さんの部屋で会ったときは蒼い眼だったはず。これは間違いない。なにもかも見透かされるような、吸い込まれるような恐怖を感じたから。

でも、いまは……

「加奈ちゃん、その瞳」

「……っ！」

驚いたように、澄んだ黒真珠がわたしを見つめた。

「あれ、気がついた？」

愉快そうに涼子さんは目を細める。

「まあ、この子にもいろいろあつてさ。なんていうか……特異体質、かな？好ましくない感情が大きくなると、スイッチが入るっていうの？見た目で区別できるのは、瞳の変色くらいなんだけどね」

適当な言葉を探しながら説明しているみたいで、わたしにはどうにも理解しづらかった。

「簡単にいっちゃうと、二重人格って思ってもらえればいいのかな？」

「二重人格……」

とてもわかりやすかったけど、それは何か違う気がした。なんとなくだが。

「厳密には……ってか、本当はそんなじゃないけど、あとは本人に聞いてちょうだい。ま、聞かないでおくのも優しさだけどね」

そういつて涼子さんが視線を送っても、加奈ちゃんは何も喋ろうとはしなかった。肯定も、否定もしない。

わたしは苦しんでるだけの加奈ちゃんを見かねて、何か声を掛けたいと思った。それなのに何も浮かばなかったから、結局さっき伝えられなかった言葉を口にしていた。

「……ごめんなさい！」

「えっ!？」

いきなり傷つけた相手に頭を下げられて、加奈ちゃんは困惑しているようだった。

「なんで、美里ちゃんが謝るの？」

「二年前のこと、わたし……」

加奈ちゃんが息を呑んだのがわかったけど、言い訳になるってわかってるけど、言わなきゃいけないと思った。

「わたし、加奈ちゃんと友達になれて嬉しかった。ひとりじゃないって思えて、心強かった。本当だよ？……でも、やっぱり怖くて、死にたくなくて。だから逃げだしたとき、ほかのこと何も考えられなかった。信じてもらえないと思うけど、見捨てたんじゃないの。」

ただ、余裕がなくて……保護されて助かったとき、すごくつらかった」

自分を弁護するうえで必要なことは全部いったはずなのに、言葉がとまらない。

わたしのちっぽけな良心が黒いものを許さないみたいに、感情が昂って勝手にすべてをさらけだそうとする。

「……けど、加奈ちゃんが死んじゃうかもしれないって思ったとき……かわいそうって、それだけだった。それよりも、自分が助かってよかったって。わたし、こんな汚い人間なんだよ！加奈ちゃんに恨まれて、当然だよっ！なんで……なんで、わたし生きてるの？ねえ、なんでなのっ！？こんなの、おかしいよ……わたしなんか、死んじゃえばよかったのにつ！」

だんだん何を言っているのか、何が言いたいのかわからなくなつて、泣き出してしまふ。

卑怯だつてわかってた。ここで泣いたら、誰も責められない。だけど、溢れだす涙は止まりそうになかった。

そんなふうな気持ちに吐き出したわたしの手を握ったまま、加奈ちゃんは慈しむように慰めてくれようとする。

「謝らないで。美里ちゃんは悪くないよ……だって、美里ちゃんはふつ々の女の子だもん。年上だとか、そんなの全然関係ない。怖いものは怖いよね。それに、しっかりしないといけないのは私だったの。だから、いいんだよ。泣かないで……私なんかのために、泣かないでよ」

「そんなことないよ！わたしのせいで……」

「いいの……ごめんね……ごめんなさい、ごめんなさい」

それから日付が変わるくらいまで、わたしたちは泣きながら謝りつづけていた。

特別そのこと自体に意味があつたわけではない。

加奈ちゃんがわたしを赦すというのはありえないことだし、あつてはいけないと思う。けれど、お互いの心のなかの何かを解りあえ

たような - - そんな気がしていた。

\* \* \*

気高い慈悲の天使、恭子ちゃん。

彷徨う薄幸の堕天使、加奈ちゃん。

一緒にいたいと想えるひと。そばにいてあげたいと想うひと。

それは、恋とは呼べないかもしれない。けれど「好き」という気持ち、たしかに心の温かい場所にあった。たぶん、嫌われても嫌いにはなれない。

とりあえずは - - その笑顔を、その涙を信じたいと思う。どんな明日が来ても、二人がいてくれれば大丈夫な気がするんだ。

だけど、どちらかを選ばなきゃいけなくなつたとき、わたしは恭子ちゃんを裏切れるのだろうか。加奈ちゃんをまた見捨てることができるのだろうか。

いまはまだ、何もわからない。そう、先のことは何も - -

## SS - 1 - 2 : 柚原美里（後書き）

美里が、ただの恭子の友達ではなく、組織と接点があるという設定。サイドストーリーで初めて登場した、神代加奈ちゃんが実は凄い重  
要。

第二章が書きたくなりました。読んでくださる方は、気長に期待してください。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4857a/>

---

光と闇の法剣-Side:A-

2010年10月8日15時27分発行